

Title	伝習録に於ける引用典例（一）
Author(s)	野村, 恵二
Editor(s)	
Citation	大阪府立大学紀要（人文・社会科学）. 1965, 13, p.103-119
Issue Date	1965-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10466/12054
Rights	

伝習録に於ける引用典例（一）

野村 恵 二

伝習録に於て引用された出典ならびに譬例について考察するに、出典としては四書五経などがその中心をなし、中でも大学・論語・孟子・中庸と一番多い。又譬例としては平易な自然現象をあげ、また實際生活にそくしたものをとりあげて極めて分り易く説いている点が目立つ。以下それら出典と譬例について先ず本稿では上巻の序と徐曰仁所録および陸原静所録に筆録されたものについて論述することとする。

先ず序および徐曰仁所録に筆録されたものについて述べる。

陽明の門人の中に私に講義を筆録していた者のあることを聞いていましめたことが、序の冒頭にある。それは医者の治療法を教育法の例として陽明自身のやりかたを述べ、門人等の心がまえとして教え訓している。即ち、

「聖賢ノ人ヲ教ウルハ、医ノ薬ヲ用ウルガ如シ。皆病ニ因ツテ方ヲ立テ、其ノ虚実・温涼・陰陽・内外ヲ酌ンデ、時時之ヲ加減ス。要ハ病ヲ去ルニ在リテ、初ヨリ定説ナシ。若シ一方ニ拘執セバ人ヲ殺サザルコト鮮シ。今某諸君ト、各々偏蔽ニ就イテ、箴切砥礪スルニ過ギズ。但ダ能ク改化セバ、即チ吾ガ言已ニ贅疣ト為ル。若シ遂ニ守リテ成訓ト為サバ、他日己ヲ誤リ、人ヲ誤ラン。某ノ罪過、復タ追イ贖ウ

可ケンヤ。」とある。

また、相手によって臨機応変、適度に説話すべきことの例として、「爰既ニ備ニ先生ノ教ヲ録ス。同門ノ友、是ヲ以テ相規ス者有リ。爰因ツテ之ニ謂ツテ曰ク、子ノ言ノ如キハ、即チ又一方ニ拘執シ、復タ先生ノ意ヲ失ウ。孔子、子貢ニ謂イテ嘗テ曰ク、予言ウコト無カラント欲ス、ト。他日ハ則チ曰ク、吾回ト言ウコト終日ト。又何ゾ言ノ一ナラザルヤ。蓋シ子貢ハ専ラ聖人ヲ言語ノ間ニ求ム。故ニ孔子ハ言ウコト無キヲ以テ之ヲ警メ、之ヲシテ諸ヲ心ニ実体シテ、以テ自得スルコトヲ求メシム。顔子ハ孔子ノ言ニ於テ、黙識心通シテ、己ニ在ラザルコト無シ。故ニ之ト言ウコト終日ナルモ、江河ヲ決シテ海ニ之カシムルガ若キナリ。故ニ孔子ノ子貢ニ於ケルノ言ウコト無キモ少シト為サズ、顔子ニ於ケルノ終日言ウモ多シト為サズ、各々其ノ可ニ当ルノミ。」がある。

この中の「予言ウコト無カラント欲ス。」は論語陽貨篇より、「吾回ト言ウコト終日。」は同じく論語為政篇より、「黙識心通。」もまた論語述而篇より、そうして、一日中話をしていても自然に通じた事の譬として、「揚子江や黄河の水を海へ切り落すようだ。」と、説いているのは孟子 尽心上篇を出典としている。なお、序の終りに次の如く、

「今備ニ先生ノ語ヲ録スルハ、固ヨリ先生ノ欲スル所ニ非ズ。吾ガ

儕ヲシテ常ニ先生ノ門ニ在ラシメバ、亦何ゾ此ヲ事トセン。惟ダ或ハ時有りテ側ヲ去リ、同門ノ友、又皆群ヲ離レテ索居セン。是ノ時ニ當ツテハ、儀刑既ニ遠クシテ、規切聞クコト無シ。愛ノ驕劣ノ如キハ、先生ノ言ヲ得テ、時時対越シテ之ヲ警発スルニ非ズンバ、其ノ摧墮靡靡セザル者幾ンド希ナリ。吾ガ儕先生ノ言ニ於テ、苟モ從ニ耳ニ入り口ニ出ダシテ、諸ヲ身ニ体セズンバ、則チ愛ノ此ヲ録スルハ、実ニ先生ノ罪人ナリ。能ク之ヲ言意ノ表ニ得テ、諸ヲ踐履ノ実ニ誠ナラシメバ、則チ斯ノ録ヤ、固ヨリ先生終日之ヲ言ウノ心ナリ。少ク可ケンヤ、ト。とあるが、この中の「群ヲ離レテ索居セン。」は礼記 檀弓上篇にあり、「耳ニ入り口ニ出ル。」⁽⁶⁾は荀子 勸学篇にある。

㊸ (1) 子曰。予欲無言。子貢曰。子如不言。則小子何述焉。子曰。天何言哉。四時行焉。百物生焉。天何言哉。

(2) 吾與回言。終日不違如愚。

(3) 子曰。默而識之。学而不厭。誨人不倦。何有於我哉。

(4) 孟子曰。舜之居深山之中。與木石居。与鹿豕遊。其所以異於深山之野人者幾希。及其聞一善言見一善行。若決江河沛然。莫之能禦也。

(5) 子夏曰。吾離群而索居。亦已久矣。

(6) 小人之学也。入乎耳出乎口。口耳之間則四寸耳。曷足以美七尺之軀哉。

以上は序に於ける陽明及び門人の語録よりのものであるが、次の徐曰仁・陸原静の二所録に於ては専ら陽明の語録のみをとりあげて、その出典、譬例について論究したい。

愛が親民の字について質問した時に陽明は次の如く答えている。

「君子ハ其ノ賢ヲ賢トシテ、其ノ親ヲ親ミ、小人ハ其ノ樂ヲ樂シテ、其ノ利ヲ利トス、⁽¹⁾赤子ヲ保ツガ如シ、⁽²⁾民ノ好ム所ハ之ヲ好ミ、民ノ惡ム所ハ之ヲ惡ム。此ヲ之レ民ノ父母ト謂ウ、⁽³⁾ト云ウガ如キノ類ハ皆是レ親ノ字ノ意ナリ。」と。これはいずれも大学よりひく。

㊸ (1) 詩云。於戲。前王不忘。君子賢其賢而親其親。小人樂其樂。而利其利。此以没世不忘也。

(2) 康誥曰。如保赤子。心誠求之。雖不中不遠矣。未有学養子。而后嫁者也。

(3) 謂云。樂只君子。民之父母。民之所好好之。民之所惡惡之。此之謂民之父母。

次いで述べた語に

「民ヲ親ム、ハ猶オ孟子ノ、親ヲ親ミ、民ヲ仁ス、⁽¹⁾ノ謂ノゴトシ。之ヲ親ムハ即チ之ヲ仁スルナリ。」とある。これは孟子 尽心上篇にあり。

㊸ (1) 孟子曰。君子之於物也。愛之而弗仁。於民也。仁之而弗親。親親而仁民。仁民而愛物。

さらに次いで言うに、

「百姓親マズ、舜、契ヲシテ司徒タラシメ、敬ンデ五教ヲ敷ク、⁽¹⁾トハ、之ヲ親ム所以ナリ。堯典ノ克ク峻德ヲ明カニス、⁽²⁾トハ便チ是レ明德ヲ明カニスルナリ。以テ九族ヲ親ム、ヨリ、平章・協和、⁽³⁾ニ至ルマデ、便チ是レ民ヲ親ムナリ。便チ是レ明德ヲ天下ニ明カニスルナリ。」と。述べてあるが、書経ならびに大学よりひいてるのである。

㊸ (1) 帝曰。契。百姓不親五品不遜。汝作司徒。敬敷五教。在寬。 (書経 舜典)

(2) 克明俊德。以親九族。 (書経 堯典)

(3) 大学之道。在明明德。在親民。 (大学)

(4) 九族既睦。平章百姓。 (書経 堯典)

(5) 百姓昭明。協和万邦。 (同前)

(6) 古之欲明明德於天下者。先治其國。 (大学)

「孔子ノ己ヲ修メテ以テ百姓ヲ安ズ、ト云ウガ如キモ、己ヲ修ム

トハ、便チ是レ民ヲ親ムナリ。民ヲ親ムト説ケバ、便チ是レ教養ノ意ヲ兼ヌ。民ヲ新ニスト説ケバ、便チ偏ルヲ覺ユ。」と。これは論語憲問篇よりひく。

④(1) 子路問君子。子曰。脩己以敬。曰如斯而已乎。曰脩己以安人。曰如斯而已乎。曰脩己以安百姓。脩己以安百姓。堯舜其猶病諸。

孝に誠一な心の中から現われて来る事柄として、

「冬時ニハ自然ニ父母ノ寒キヲ思量シテ、便チ自ラ去イテ箇ノ温ノ道理ヲ求メンコトヲ要メ、夏時ニハ自然ニ父母ノ熱キヲ思量シテ、便チ自ラ去イテ箇ノ清ノ道理ヲ求メンコトヲ要ム。」と、述べているが、これは礼記 曲礼 上篇よりひく。

④(1) 凡為人の子之礼。冬温而夏清。昏定而晨省。

そして、それ故に必ずこの孝行に誠一な心があつてこそこれらの事柄が生ずるのを樹木に譬えて、

「這ノ孝ニ誠ナルノ心ハ便チ是レ根ニシテ、許多ノ条件ハ、便チ是レ枝葉ナリ。須ズ先ヅ枝葉ヲ尋ネテ、然ル後ニ去イテ根ヲ種ウルニアラズ。」と、説いている。

さらに、深い愛情がもととなって自然によい結果がうまれることの例として、

「孝子ノ深愛有ル者ハ、必ず和氣有リ、和氣有ル者ハ、必ず愉色有リ、愉色有ル者ハ、必ず婉容有リ。」と、礼記 祭義篇の中からとっている。親を奉養する時にも、至善の心がこの上なく天理に純一となることが必要で、それには、

「此レ則チ学問思弁ノ功有ルニ非ズンバ、将ニ毫釐モ千里ノ繆ヲ免レザラントス。所以聖人ニ在リト雖モ、猶才精一ノ訓ヲ加ウ。」と述べている。

④(1) 毫釐千里繆。(礼記 経解篇)
(2) 惟精惟一。允執厥中。

知行合一を説明するに、次の如く大学にある語をひき、また譬をあげて説いている。

「意を誠にするのは自分を欺かないことであつて、例えば美しい色を好み、嫌な臭いを悪むようなものだ。」

「好色ヲ見ルハ知ニ属シ、好色ヲ好ムハ行ニ属ス。只ダ那ノ好色ヲ見ルノ時、己ニ自ラ好ム。是レ見テ後、又箇ノ心ヲ立テテ去キ好ムニアラズ。悪臭ヲ聞グハ知ニ属シ、悪臭ヲ悪ムハ行ニ属ス。只ダ那ノ悪臭ヲ聞グノ時、己ニ自ラ悪ム。是レ聞ギテ後、別ニ箇ノ心ヲ立テ、去キ悪ムニアラズ。鼻塞ノ人ノ如キハ、悪臭前ニ在ルヲ見ルト雖モ、鼻中曾テ聞キ得ザレバ、便チ亦甚シクハ悪マズ。亦只ダ是レ曾テ臭ヲ知ラザシバナリ。」

④(1) 所謂誠其意者。毋自欺也。如恶恶臭。如好好色。此之謂自謙。さらに、

「就チ某人孝ヲ知り、某人弟ヲ知ルト称スルガ如キモ、必ず是レ某人己ニ曾テ孝ヲ行イテ、方ニ他孝ヲ知り弟ヲ知ルト称ス可シ。只ダ是レ些ノ孝弟ノ話ヲ説クコトヲ曉リ得レバ、便チ称シテ孝弟ヲ知ルト為ス可シト成サズ。又痛ンデ方ニ痛ヲ知ル。寒ヲ知ルモ、必ず己ニ自ラ寒ユ。饑ヲ知ルモ、必ず己ニ自ラ饑ウ。」と、述べて、知と行の不可分を説き、分けられないのが知行の本来の姿であり、私意によって少しも隔てられない状態であることを強調している。

また、「今ノ人卻ツテ就チ知行ヲ将テ分ケテ兩件ト作シテ去キ做ス。以為ヘラク、必ず先ヅ知リテ然ル後ニ能ク行ハン。我如今且ク去イテ講習討論シテ知ノ工夫ヲ做シ、知ツテ真ナルヲ待ツテ方ニ去イテ行ノ工夫ヲ做サント。故ニ遂ニ身ヲ終ルマデ行ワズ、亦遂ニ身ヲ終ル

マア知ラザルナリ。」と、述べて、

「これは決して軽い病気ではなく、そのようになったのも短い間のことではない。私が知行合一を説くのは、まさにこの病気に対する治療法にすぎないのである。」と、説いているのである。

次に陽明は愛の質問に答えて、

「昔子夏は孔子を心から信じて、孔子の説にそのまま従ったが、曾子は自己の心にたずね求めて確かめたというが、聖人を心から信じて教えのままを奉ずるのもよいが、自分自身の心に尋ね求めることの適切なには及ばない。」と、孟子、公孫丑上篇(朱子注)からひいて訓している。

また、

「心ヲ尽シ、性ヲ知り、天下ヲ知ルトハ是レ生知安行ノ事ナリ。」

「性ハ是レ心ノ体ニシテ、天ハ是レ性ノ原ナリ。心ヲ尽ストハ即チ是レ性ヲ尽スナリ。惟ダ天下ノ至誠ノミ、能ク其ノ性ヲ尽シ、天地ノ化育ヲ知ルト為ス。」と、説くがこれらはいずれも中庸による。

⑩ (1) 或生而知之。或学而知之。或困而知之。及其知之^一也。或安而行之。或利而行之。或勉强而行之。及其成功^一也。

(二) 唯天下至誠。為能尽其性。能尽其性。則能尽人之性。能尽人之性。則能尽物之性。能尽物之性。則可以贊天地之化育。可以贊天地之化育。則可以與天地參矣。

心を中心にして考えるべきだということについて、

「例えば、わが意が親に事えることに行っているなら、親に事えることが一つの物であり、意が君に事えることに行っているなら、君に事えることが一つの物である。また意が民を仁し物を愛することにしているなら、民を仁し物を愛することが一つの物であり、意が視たり、聴いたり、言ったり、動いたりすることに行っているなら、視・

聴・言・動が一つの物である。この故に、私は心の外の理はなく、心の中にある。」と、説いているのである。さらに「中庸に言う『誠アラザレバ物無シ。』とか、大学に言う『明德ヲ明カニスル。』という修行は、ただこの意を誠にする修行であって、意を誠にする修行は格物に外ならないのである。」と、説く。

「格物について孟子 離婁上篇にある『大人ハ君心ヲ格ス。』とある格の字と同義で、わが心の正しくない状態を去って、本体の正しい姿を完全にする意味である。」

⑩ (1) 人不足与適也。政不足問也。惟大人為格君心之非。

「幼児が井戸に落ちようとするのをみれば、自然に惻隱の情を覚える。と孟子公孫丑上篇にあるように、本心に立てば自然にそうした気持ちにならざるを得ないのである。」

⑩ (1) 今人乍見孺子將入於井。皆有怵惕惻隱之心。

「本心に立てば自然にそうした気持ちにならざるを得ない。この自然の知のはたらきこそ孟子尽心上篇にある良知である。」¹⁾

⑩ (1) 人之所不学而能者。其良知也。所不慮而知者。其良知也。

もしこの良知が発動して、そこに私意の妨げがないのびらそれこそ孟子 尽心下篇にある所謂「惻隱ノ心ヲ充タセバ、仁勝ゲテ用ウ可カラザルナリ。」であるということも説いている。

⑩ (1) 人能充無欲害人之心。而仁不可勝用也。

次に論語 雍也篇にある博文と約礼とは本来別のことではなく、約礼は、ただ心が純粹に一つの天理となるようにすることに外ならない。ということも述べているが、

⑩ (1) 子曰。君子博学於文。約之以礼。亦可以弗畔矣乎。

この心が純粹に天理となるようにするには、理の現われた場(於て修

行しなければならぬとし、例えば、

「親ニ事ウルニ発見スル時ノ如キハ、親ニ事ウル上ニツイテ此ノ天理ヲ存スルコトヲ学ビ、君ニ事ウルニ発見スル時ハ、君ニ事ウル上ニツイテ此ノ天理ヲ存スルコトヲ学ビ、富貴貧賤ニ処スルニ発見スル時ハ、富貴貧賤ニ処スル上ニツイテ此ノ天理ヲ存スルコトヲ学ビ、患難夷狄ニ処スルニ発見スル時ハ、患難夷狄ニ処スル上ニツイテ此ノ天理ヲ存スルコトヲ学ブ。」⁽¹⁾と、いうようにすべての細かい言動に至るまで常にそのようにし、理の発現の場に応じて何時でもすぐ、その事において天理を保持するよう学ぶのである。と中庸の語を引用して説いてある。

㊦ (1) 君子素其位而行。不願乎其外。素富貴行乎富貴。素貧賤行乎貧賤。素夷狄行乎夷狄。素患難行乎患難。君子無人而不自得焉。

また、程子ノ謂ウ、「人心ハ即チ人欲、道心ハ即チ天理。」⁽¹⁾についてその説の正しさを説明しているが、この人心道心⁽¹⁾ということは書經大禹謨篇や荀子解蔽篇に見えている。

㊦ (1) 人心惟危。道心惟微。惟精惟一。允執厥中。

㊦ (1) 昔者舞之治天下也。云云。故道經曰。人心之危。道心之微。危機之幾。唯明君子而後能知之。

「天理を保持して人欲を去ることについては、孔子もかつて人に説明したことがある。しかしそれは人の質問により、またそれぞれの人の力量に応じて説明したので、余り多くのことは言わなかった。それは人が単に語句の上だけで求めようとするのを恐れたからであつて、孔子自身も、論語陽貨篇の中で、『予、言ウコト無カラント欲ス。』⁽¹⁾と、言っているほどである。」

㊦ (1) 予欲無言。

「孟子は『仲尼ノ門、桓・文ノ事ヲ道ウ者無シ。是ヲ以テ後世伝ウル無シ。』⁽¹⁾といっているが、これが孔子一門の家法である。『孟子 梁恵王上篇よりひいて説く。

㊦ (1) 齊宣王問曰。齊桓晉文之事。可得聞乎。孟子対曰。仲尼之徒。無道桓文之事者。是以後世無傳焉。臣未之聞也。

「後世の儒者はただ覇者の学問だけを研究しているので、それにつきものの多くの隠謀や詭計を知ること努めた。これは全くの功利的な心情によるものであつて、孔子が經典を作つた意図とは正反對のものである。だからどうして孔子が經書を作つたか、その真意を推量し理解することが出来よう。このことは天の徳に達した程の聖人でないと、容易に語りにくいことである。」と、説いているが、天徳は中庸にある。

㊦ (1) 苟不固聰明聖知達天徳者。其孰能知之。

「孔子はかつて言われた。『私は昔の史官が不明の箇所は何も書かないでそのままに残しておいた意味がわかるようになった。』⁽¹⁾と。『論語 衛靈公篇にあるものを例として説き。次いで、

「孟子もまた言った。『書經の文句のすべてを信じるなら、むしろ書經のない方がましだ。だから私は武成篇の中では、竹簡二三枚しか取らないのだ。』と。孟子 尽心下篇にあるものを例として説いている。

㊦ (1) 子曰。吾猶及史之闕文也。

㊦ (2) 孟子曰。尽信書則不如無書。吾於武成取二三策而已矣。仁人無敵於天下。以至仁伐至不仁。而何其血之流杵也。

「政治のやり方は違つていても根本の主旨は一つであつたから、孔子は堯・舜については、これを本源として述べ、文王・武王について

は、これを模範として世に明らかにしたのである。」と説いている。がこの祖述憲章については中庸にある。

㊦(1) 仲尼祖述堯舜。憲章文武。

「文・武ノ法ハ、即チ是レ堯・舜ノ道ナリ。但ダ時ニ因ツテ治ヲ致セバ、其ノ設施政令ハ、己ニ自ラ同ジカラズ。即チ夏・商ノ事業ハ、之ヲ周ニ施スモ、己ニ合ワザル有リ。」

「それ故に周公は禹・湯・文武の三王の政治を兼ね行なおうとしたものの、現実には合わないことがあると、天を仰いで考え、夜を日に継いで思い悩んだのである。まして太古の政治がどうして二度と行ない得よう、だから古いものを孔子が省略したのは当然のことである。」と説いているが、これは孟子、離婁下篇にある。

㊦(1) 用公思兼三王以施四事。其有不合者。仰而思之。夜以繼日。幸而得之坐待旦。

「孔子云ウ『鄭声ヲ放ツ、鄭声ハ淫ナリ。』ト、また、曰ク『鄭声ノ雅楽ヲ乱ルヲ惡ム、鄭・衛ノ音ハ亡国ノ音ナリ。』ト、これ論語の衛靈公・陽貨の二篇および礼記の楽記篇にあり。

㊦(1) 放鄭声。遠佞人。鄭声淫。佞人危。

㊦(2) 惡鄭声之乱雅楽也。

㊦(3) 魏文侯曰。敢問溺音何從出也。子夏對曰。鄭音好濫淫志。宋音燕女溺志。衛音趨數煩志。齊音放辟喬志。此四者皆淫於色而害於德。是以祭祀弗用也。

そして曰仁の記録の終りの部分に、徐愛の言ではあるが、

「先生ノ学ハ、孔門ノ嫡伝タリ、是ヲ舎イテハ皆傍蹊小徑、断港絶河ナルヲ信ズ。」とある。即ち先生の学問こそ孔門の正伝であって、これを除けば他の学問は皆わきみち、こみちであり、水の通わない河川

に等しいことを初めて信ずるようになった。と道路、河川を譬として述べている。

2

次に陸原静所録に筆録されたものについて述べる。先づ、

「主一ノ功ハ、書ヲ読ムガ如キハ、即チ一心書ヲ読ム上ニ在リ、客ニ接スレバ則チ一心客ニ接スル上ニ在レバ、以テ主一ト為ス可キヤ。」と、いう陸澄の問に対して、

「君のその論からすると、色を好むときは、心が全く色を好む上にあつて他のことを顧みなかったり、財貨を好むときは、心が全く財貨を好む上にあつたなら、それが主一ということになりそうであるが、そんなことが果して許されるだろうか。これは外の物を逐って行くことであつて、主一ではない。主一とは、ただ一つの天理だけを主として他のことを思わないことである。」とあるが、引いてある例は孟子梁惠王下篇からである。

㊦(1) 王曰。寡人有疾。寡人好货。对曰。昔者公劉好货。詩云。乃積乃倉。乃裹餼糧。于寔于糞。思戢用光。弓矢斯張。于戈威揚。爰方啓行。故居者有積倉。行者有裹糧也。然後可以爰方啓行。王如好货。与百姓同之。於王何有。

㊦(2) 王曰。寡人有疾。寡人好色。对曰。昔者大王好色。愛厥妃。詩云。古公亶甫。來朝走馬。率西水滸。至于岐下。爰及姜女。聿來胥宇。當是時也。内無怨女。外無曠夫。王如好色。与百姓同之。於王何有。

「天理の念が常に中に存することによって人は次第に向上し、やがて美より大に、大より聖に、聖より神に⁽¹⁾と進んで行けるのである。」は孟子 尽心下篇より例をとる。

㊦(1) 可欲之謂善有諸己之謂信。充美之謂美。充實而有光輝之謂大。大而

化之ヲ謂聖。聖而不可知之ヲ謂神。

志を立てるとは如何なることかという質問に対して、「天理を存する一念から、存養⁽¹⁾し⁽²⁾拡充⁽³⁾して行つたものに外ならない。」と、述べているが、存養も拡充もいづれも、孟子 尽心上篇および公孫丑上篇よりひく。

③ (1) 存其心養其性。所以事天也。

(2) 凡有四端於我者。知皆擴而充之矣。

また、修行法の例として、「日間ノ工夫、紛擾ヲ覚エバ、即チ静座シ、書ヲ看ルニ懶キヲ覚エバ、則チ且才書ヲ看ヨ。」と説く。これまた「病氣に応じて薬を調合する。」ことであつて、すなわち、病氣と投薬の譬で修行法を説いている。

さらに、また、弟子孟源の欠点を直すために次の様な譬を述べて諭している。即ち、

「此ハ是レ汝一生ノ大病根ナリ。譬エバ方丈ノ地内ニ、此ノ一大樹ヲ種ウルガ如シ。雨露ノ滋、土脈ノ力ハ、只ダコノ大根ヲ滋養スルノミ、四傍ニ縦イ些ノ嘉穀ヲ種エンコトヲ要ムルモ、上面ハ此ノ樹葉ニ遮覆サレ、下向ハ此ノ樹根ニ盤結サレテ、如何ゾ生長シ成サン。須ク用テ此ノ樹ヲ伐去シ、織根ヲ留ムル勿カルベク、方ニ嘉種ヲ種植ス可シ。然ラズンバ、任イ汝耕耘培壅ストモ、只ダ是レ此ノ根ヲ滋養スルノミ。」とあるが、大樹と嘉穀をもつて、欠点と善性に譬えている。

「聖ハ堯・舜ノ如シ。然レドモ堯・舜ノ上、善尽クルコト無シ。悪ハ桀・紂ノ如シ。然レドモ桀・紂ノ下、悪尽クルコト無シ。桀・紂ヲシテ未ダ死セザラシメバ、悪寧ゾ此ニ止ランヤ。」と善悪の代表として聖帝堯・舜を、悪王の代表として桀・紂を例としている。

また、同じつづきとして、

伝習録に於ける引用典例 (一)

「善ヲシテ尽クル時有ランメバ、孟子 離婁下篇にあるような、『文王は道を望みながら見ることができなかった。』などということが、どうしてあるだらうか。」と説く。

④ (1) 文王視民如傷。望道而未之見。

「夫レ目ノ見ルヲ得可ク、耳ノ聞クヲ得可ク、心ノ思ウヲ得可キ者ハ、皆下学ナリ。目ノ見ルヲ得可カラズ、耳ノ聞クヲ得可カラズ、口ノ言ウヲ得可カラズ、心ノ思ウヲ得可カラザル者ハ上達ナリ。木ノ栽培灌漑ノ如キハ、是れ下学ナリ。昼夜ノ間ニ自然ニ生育シ、枝葉ノ伸ビ茂ルノハ上達ニ当ル。」と説くが、論語 憲問篇および孟子 告子上篇よりひく。

④ (1) 子曰。莫我知也夫。子貢曰。何為其莫知子也。子曰。不怨天。不尤人。下学而上達。知我者其天乎。

(2) 牛山之木嘗美矣。以其郊於大國也。斧斤伐之。可以為美乎。是其日夜之所息。雨露之所潤。非無萌蘖之生焉。牛羊又從而牧之。是以若彼濯濯也。人見其濯濯也。以為未嘗有材焉。此豈山之性也哉。雖存乎人者。豈無仁義之心哉。其所以放其良心者。亦猶斧斤之於木也。且且而伐之。可以為美乎。其日夜之所息。平旦之氣。其好惡與人相近也者幾希。

「精⁽¹⁾ノ字ハ米ニ從エバ、姑ク米ヲ以テ之ヲ譬エン。

米が純白になるようにしようとするのは惟れ⁽¹⁾の修行に当る。それをするには、米を臼で搗き、ぬかを箕であおり去り、ふるいにかけて屑等を除きえらびわけけるなどの、精米の労を加えなければ、できないことである。このうすづき、あおり、ふるい、えらぶという仕事は、惟れ精の修行に当る。それただこの米の純白になるのを分けてみれば、二つの事であるが、事實は同じことなのである。」と説くが、書經 大禽謨の例をあげている。

一〇九

㊦(1) 前例参照

なお、次いで、

「博く学び、審かに問い、慎んで思い、明かに弁じ、篤く行⁽¹⁾う。」は
いづれも皆惟れ精を行なつて惟れ一を求めることである。」と中庸より
ひいて説く。

㊦(1) 博学之。審問之。慎思之。明弁之。篤行之。

「漆彫開曰ク、『吾斯ヲ之レ未ダ信ズル能ワズ。』⁽¹⁾と答えたら、孔子
はその無欲さを悦ばれた。」

「子路、子羔ヲシテ費ノ宰為ラシム。子曰ク『夫ノ人ノ子ヲ賊ワ⁽²⁾ン。』
と、言つて反対された。」

「曾点志ヲ言ウ。孔子はこれを許されている。」

この三つの例からみると孔子の意向がどこにあつたかが理解でき
る。これらは皆ただ立身出世だけを目的として、真に自分の修行のた
めに学問しない弟子を戒めた例であつて、それぞれ論語 公治長・先
進の両篇よりひいたものである。

㊦(1) 子使漆彫開仕。対曰。吾斯之未能信。

(2) 子路使子羔為費宰。子曰。賊夫人之子。

(3) 子路。曾皙。冉有。公西華侍坐。子曰。以吾一日長乎爾。毋吾以也。

居則曰。不吾知也。如或知爾。則何以哉。子路卒爾而對。曰。千乘
之國。攝乎大國之間。加之師旅。因之以饑饉。由也為之。比及三
年。可使有勇。且知方也。夫子晒之。求爾何如。對曰。方七十。如
五六十。求也為之。比及三年。可使足民。如其禮樂。以俟君子。赤
爾何如。對曰。非日能之。願學焉。宗廟之事。如曾同。端章甫。願
為小相焉。鼓瑟希。鏗爾舍瑟而作。對曰。異乎三子者之撰。子曰。何
傷乎。亦各言其志也。曰。莫者春服既成。冠者五六人。童子六七人
。浴乎沂。風乎舞雩。詠而歸。夫子喟然曰。吾與點也。三子者出。

曾皙後曾皙曰。夫三子者之言何如。子曰。亦各言其志也已矣。曰。
夫子何晒由也。曰。為國以禮。其言不讓。是故晒之。

「孔門ノ志ヲ言ウヤ、由・求・ハ政事ニ任ジ、公西赤ハ禮樂ニ任
ズ。多少実用ナリ。曾皙ノ説キ來ルニ及ンデハ、卻ツテ要約ノ事ニ似
タリ。聖人卻ツテ他ヲ許ス。是ノ意如何。」という陸澄の質問に答えて
陽明は次の様に述べている。

「それは子路・冉有・公西華の三人には、自己の志望を一つに決め
て、固執する意⁽²⁾必の様子が見られたからである。もし一つことに心を
決めて動かないようであると、とかく人は一方に偏つて、これはでき
るが、外のことは出来ないという様なことになり易い。曾点のこの意
思にはそうした意必の態度が少しもなく、すなわち、『自己のおかれ
た地位のままに、事を行い、それ以外のことは考えない。夷狄にあれ
ば夷狄にあるようにし、患難の中にあれば、患難の中にあるようにし
ておれば、どこへ行つても、うまくいって失敗することがない。』とい
うようなふうで柔軟性がある。」と答えている。が、論語 先進・子罕
の両篇および中庸よりとつてある。

㊦(1) 前例参照

(2) 子絶四。母意。母必。母固。母我。

(3) 前例参照

さらに、語を次いで、

「子路・冉有・公西華の三人は道具であるが、曾点は道具ではない⁽²⁾
とし、曾皙の言をとつたのであるが、しかし三人ともすぐれた人物
で、世間のただ空言だけはいて実の伴わない人間とはちがうからそ
れ故に、孔子も彼等の意見を認めたのである。」と説いているが、論語
の公治長および為政の両篇よりひいている。

④ (1) 子貢問曰。賜也何如。子曰。女器也。曰何器也。曰瑚璉也。

(2) 子曰。君子不器。

「学問をするにはまず根原がなければならない。根原のところから出発して、努力を加えて行き、ちょうど水が大きな岩の上を流れる時途中にある窪みを一つ一つ満たしながら流れて行くように、順序を経て進まなければならない。」という述言にも論語の公治長および為政の両篇から例としてひかれてゐる。

⑤ (1) 孟子曰。原泉混混。不舍昼夜。盈科而後進。放乎四海。有本者如是。是之取爾。

次に、

「仙家ノ嬰兒ヲ説ク亦ハ善ク譬ウ。嬰兒ノ母ノ胎内ニ在ル時ハ、只ダ是レ純氣ニシテ、何ノ知識力有ラン。胎ヲ出デテ後、方ニ始メテ能ク啼ク。既ニシテ後能ク笑ウ。又既ニシテ後能ク其ノ父母兄弟ヲ識認ス。又既ニシテ後能ク立チ能ク行キ、能ク持チ能ク負ウ。卒ニハ乃チ天下ノ事、能クス可カラザル無シ。皆是レ精氣日ニ足レバ則チ筋力日ニ強ク、聰明日ニ開ケバナリ。是レ胎ヲ出ズルノ日、便チ講求シ推尋シ来ルニアラズ。故須ク箇ノ源有ルベシ。」とし、学問にもこの赤ん坊が胎内にある時の純氣の様な根原のものがなければならない。と譬えて説いてゐる。

「聖人はよく『天地をその位置に安定させ、万物を生育するの』境地に到達したものであるが、その根原のところは、ただ心を喜怒哀楽の未発の中におくことから修養して来たのに外ならない。」と、中庸の語句を、とり入れて説いてゐる。

⑥ (1) 喜怒哀楽之未發謂之中。發而皆中節。謂之和。中也者。天下之大本也。和也者。天下之達道也。致中和。天地位焉。万物育焉。

「学問に志を立てて修行することは、樹木を栽培するようなもの

伝習録に於ける引用典例 (1)

ある。根が出たり芽生する時にはまだ幹がなく、幹ができてはまだ枝はない。やがて、枝が出れば葉がつき、葉が出て後に花や実がつく、だから最初根を植える時は、ひたすら土を寄せ水をかけるだけでなく、枝を予想し、葉を予想し花や実のことを予想してはならない。現実を離れて遠い先のことを想像するのは何の益もないことである。ただ栽培の努力さえ忘れなければ、枝葉や花実のつかないことを心配する必要はないのである。」これは将来のことは全く考慮しないで、まず根原のところを力を注げば、やがては大成する。初めから多くの知識を求めてはならないことを主張する譬として述べてゐる。

「人ニ学ヲ為スヲ教ウルハ、一偏ヲ執ル可カラズ。初学ノ時ハ、心猿意馬、栓縛シ定メズ。其ノ思慮スル所ハ、多クハ是レ人欲ノ一辺ナリ。故ニ且ク之ニ静坐シテ思慮ヲ息ムルヲ教ヘ、之ヲ久シウシテ其ノ心意ノ稍定ルヲ俟ツ。」と説くが、心の妄動しやすい状態を猿や馬の動く状態に譬えて、仏語よりひいてゐる。

⑦ (1) 心猿罷跳。意馬体馳。(趙州録遺表)

制情猿之逸躁、繫意馬之奔馳(慈恩寺三蔵伝九)

心馬馳。惡道放逸、叵禁制。(梵網經)

心如猿猴、遊五欲樹、不暫住故。(心地觀經)

諸凡夫。心如野馬。識劇猿猴。馳騁六塵。何曾停息。(安案集)

「只、ダ懸空ニ静守シテ、槁木死灰ノ咎クナルハ、亦用無シ。須ク他ヲシテ省察克治セシムベシ。」

⑧ (1) 南郭子綦隱几而坐。仰天而嘘。嗒然似喪其偶。顔成子游立侍乎前曰。何居乎。形固可使如槁木。而心固可使如死灰乎。(莊子 齊物論篇) 止如槁木。(礼記 樂記篇)

(2) 次言存養省察之要。(朱熹 中庸章句)

「その省察と克治の努力は、如何なる時も間断があつてはならな

い。それには恰も賊を追払うように徹底的に除去し、掃い清める心構えが必要である。」と説く。即ち、省察・克治の努力を賊を追払うように絶えず注意し、排除廓清すべきであると譬言している。

「事無キ時ハ、色ヲ好ミ、貨ヲ好ミ、名ヲ好ム等ノ私ヲ將テ、逐一追究シ搜尋シ出シ来リ、定ズ病根ヲ抜キ去リ、永ク復起ラザラシムルヲ要メテ、方ニ始メテ快ト為ス。常ニ猫鼠ヲ捕ウルガ如ク、眼ヲ一ニシテ看、耳ヲ一ニシテ聴キ、纒ニ一念ノ萌動スル有レバ、即チ與ニ克チ去キ、斬釘截鉄。姑クモ他ノ方便ヲ容與ス可カラズ、他ノ出路ヲ放ツ可カラズ。方ニ是レ真実ニ力ヲ用ウルナリ。」私欲の起るのにたえず注意すべきをこの様にたとえて表現している。

㊸ (1) 前例参照

「何ヲカ思イ、何ヲカ慮ラント曰ウト雖モ初学ノ時ノ事ニ非ズ。初学ハ必ず須ク省察克治ヲ思ウ可シ。即チ是レ誠ヲ思ウナリ。」と説くがこれなど易の繫辞下伝および孟子 離婁上篇より引用す。

㊸ (1) 子曰。天下何思何慮。天下同帰而殊塗。一致而百慮。天下何思何慮 (2) 是故誠者天之道也。思誠者人之道也。

「父と子の愛情は人間の天性に本づく自然のものである。」⁽¹⁾と述べているのは孝経にある。

㊸ (1) 父子之道。天性也。君臣之義也。

「君ハ君タリ。臣ハ臣タリ。父ハ父タリ。」⁽¹⁾

「名分は正され、言うことには筋がとおり、⁽²⁾一挙にして立派な政治を天下に施行し得ることになるであらう。

孔子ノ名ヲ正スハ、或ハ是レ此ノ如カラシムカ。」⁽²⁾

いずれも論語 顔淵篇・子路篇よりでている。

㊸ (1) 齊景公問政於孔子。孔子対曰。君君。臣臣。父父。子子。

(2) 子路曰。衛君待子而為政。子將奚先。子曰。必也正名乎。子路曰。有是哉子之迂也。奚其正。子曰。野哉由哉。君子於其所不知。蓋爾如也。名不正。則言不順。言不順。則事不成。事不成。則禮樂不興。禮樂不興。則刑罰不中。刑罰不中。則民無所措手足。故君子名之必可言也。言之必可行也。君子於其言。無所苟而已矣。

「子供が危篤の知らせが来たような場合には多くの人は心配するのが天理の当然だとして一途に心配するものだが、それはすでに「心に憂患することがあると、心の正常が得られない」という状態になっていることに気がつかないのである。」⁽¹⁾と、大学よりひいて説いている。

㊸ (1) 所謂脩身在正其心者。身有所忿懣。則不得其正。有所恐懼。則不得其正。有所好樂。則不得其正。有所憂患。則不得其正。

「大体、人は強い刺激を受けた場合は、多くは感情過多になるもので、過少のことは少ない。もし少しでも感情に走り過ぎたなら、それは心の本体ではないから、必ずよく調節して適度にしなければならぬ。例えば、父母が亡くなった時には、子たるものは悲しさの余り、哭いたままで死んだ方が、気持がよいとしてそれを願わないものはないが、しかしながら、かえって次の様にいわれている。『父母の喪には悲しみのため体はやつれることがあっても、命を無くしてはならぬ。』とある。」⁽¹⁾と、孝経の例をあげて、限度をこしてはならないことを訓している。

㊸ (1) 三日而食。教民無以死傷生。毀不滅性。此聖人之政也。

「喜怒哀楽の未発の中の状態は、普通の人が皆あるとはいえない。もともと本体と作用とは一源であるから、この本体があればそのままこの作用がある。」と説くが、これは程伊川 易伝序よりとる。

㊦(1) 前例参照

(2) 至微者理也。至著者象也。体用一源。顯微無間。

「夜氣ハ是レ常人ニ就イテ説ク。学者能ク功ヲ用ウレバ、則チ日間事有ルモ事無キモ、皆是レ此ノ氣ノ翕聚發生スル処ナリ。聖人ハ則チ夜氣ヲ説クヲ消イズ。」孟子 告子上篇よりひいて説く。

㊦(1) 其且昼之所為。有牾亡之矣。牾之反覆。則其夜氣不足以存。則其達禽獸不遠矣。人見其禽獸也。而以為未嘗有才焉者。是豈人情也哉。
(2) 翕也者合也。(夏小正伝)

「操れば則ち存し、舍つれば則ち亡す、出入時無く、其の郷を知る莫しとは、惟だ心の謂いか。」⁽¹⁾ という孟子の言についての陸澄の質問に対して陽明曰うに、孟子が、「心は出入りするのに決った時がなく、本来の在りかの分らぬもの。」⁽¹⁾ といったのは一般普通の人の心について説いたのであるが……。「孟子 告子上篇よりひく。

㊦(1) 苟得其養。無物不長。苟失其養。無物不消。孔子曰。操則存。舍則亡。出入無時。莫知其郷。惟心之謂与。

操存舎亡に関する前文に次いで近思録 存養篇にある程明道の言を引用して次の如く説く。

「程子は『心を常に体内に止めておかねばならない』⁽¹⁾と言ったが、その体内も実は天理に外ならないのである。」

㊦(1) 心要在腔子裏。

敬便在腔子裏。(朱子語類)

問。心要在腔子裏。若慮事応物時如何。朱子曰。身在此。則心合在此。(同前)

次いで、また、

「出入ハ亦只ダ是レ動靜なり。動靜端無ケレバ、豈郷有ランヤ。」に

伝習録に於ける引用典例(一)

於ても同じく近思録、道体篇よりとっている。

㊦(1) 動靜無端。陰陽無始。非知道者。孰能識之。

王嘉秀が陽明に質問した語の中に次の様なものがある。すなわち、
「仙ハ長生久視ヲ以テ、人ヲ誘ッテ道ニ入ラシム。」⁽¹⁾と。これは老子の説である。

㊦(1) 治人事天。莫若嗇。夫唯嗇。是謂早服謂之重積德。重積德則無不克。無不克則莫知其極。莫知其極。可以有國之母。可以長久。是謂深根固柢。長生久視之道。

この王嘉秀の質問への陽明の答の中に次の様なものがある。すなわち
「一陰一陽之ヲ道ト謂ウ。但ダ仁者ハ之ヲ見テ、便チ之ヲ仁ト謂イ、智者ハ之ヲ見テ、便チ之ヲ智ト謂イ、百姓ハ又旧ニ用イテ知ラズ。故ニ君子ノ道鮮シ。」⁽¹⁾と。易に繫辭伝よりとる。

㊦(1) 一陰一陽之謂道。繼之者善也。成立者性也。仁者見之謂之仁。知者見之謂之知。百姓日用而不知。故君子之道鮮矣。

「後世ノ儒者ノ如キハ、道理ヲ將テ一説イテ鱗漏無カラシムトヲ要メ。箇ノ格式ヲ立定ス。此レ正ニ是レ一ヲ執ルナリ。」⁽¹⁾とあるがこれ孟子 尽心上篇よりとる。

㊦(1) 子莫執中。執中為近之。執中無權。猶執一也。

「人間の念は『樹の根や芽の』ようなものであって、志を立てるのは、この善い念を生長確立させることである。孔子が七十になって、『わが心のままに行動しても、規範を躰えることがない。』⁽¹⁾と言われた境地はこの志の樹が成熟に至ったことに外ならない。すなわち、これは志を立ててからそれがとげられるまでその芽生え生長を樹木のそれに譬えている。孔子の言は論語 為政篇にあり。

㊦(一) 吾十有五而志於学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲。不踰矩。」

「精神・道徳・言動ハ大率収斂ヲ主ト為ス。発散ハ是レ已ムヲ得ザルナリ。天地・人物皆然リ。」とあるが、これなども人間の精神や道徳的行為は勿論一般的言動に至るまで天地万物に則して考へるべきであると、天地万物の原理と例えて説いている。

「文中子は『聖人の全体を具備しているが、型が小さい。』⁽¹⁾といった様なそれに近い人であるのに惜しいことに彼は若死した。」と、陸澄の問いに對えて、孟子 公孫丑上篇にある語をひいて陽明は述べている。

㊦(一) 昔者竊聞之。子夏。子游。子張。皆有聖人之一体。冉牛。閔子。顏淵。則具體而微。」

「自己の私欲に克つ⁽¹⁾には、必ず心中を払い清めて、少しもそのあとを残さぬようにして、やっとよいのである。僅かでもそれが残っていると、多くの悪が手を引き合つて来るから注意しなければならぬ。」私欲を除く修行として克己⁽¹⁾ということを説いているが、論語 顏淵篇に克己⁽¹⁾のことがある。

㊦(一) 顏淵問仁。子曰。克己復礼。為仁。

「学問する人は、まず自己の務むべきことに努力するのが大切で、その他のことは後廻しにした方がよい。」と説く。当務為急⁽¹⁾ということは孟子 尽心上篇にあり。

㊦(一) 孟子曰。知者無不知也。当務之為急。仁者無不愛也。急親賢之為務。堯舜之知而不徧物。急先務也。堯舜之仁不徧愛人。急親賢也。

「道に精・粗の別があるのでなく、人の見方に精と粗があるのである。」と説き、次の様な譬を述べている。すなわち、

そのことは、この部屋の様なものであって、人が最初外から入って

来た時には、大体の様子がこの様であるとわかるだけであるが、しばらくすると、柱や壁なども、その一つ一つがはっきりと見えて来るしなおさらに、しばらくすると、柱の上部にいくらか彫り模様のあることもすべて細かく見えて来る。しかし初めの一部屋であることには變りがないのである。」と。

「私欲ノ日ニ生ズルコト、地上ノ塵ノ如ク、一日掃ハザレバ、便チ又一層有ルヲ。着実ニ功ヲ用イバ便チ見シ。道ニ終窮無シ。愈々探レバ愈々とシ。必ズ精白ニシテ一毫ノ微セザル無カラシメバ、方ニ可ナリ。」とあるが、これは私欲が心に生ずるのを地上の塵に譬え、また、玄米を精精白にするのに譬えて、徹底的に究明して、僅かの疑問や曖昧さも残さないようにするよう注告している。

「人若シ真実ニ己ニ切シテ功ヲ用イテ己マズンバ、則チ此ノ心ニ於テ天理ノ精微ハ、日ニ一日ヨリ見、私欲ノ細微ハ、亦日ニ一日ヨリ見レ。若シ克己ノ工夫ヲ用イズンバ、終日只ダ是レ説話スルノミニシテ、天現ハ終ニ自ラ見ザルナリ。」と説いているが、このことは路を歩いて行くのと同じで、ある区間を歩けば、その区間だけのことはよく分るし、辻のわかれ道へ出て疑わしくなれば、人に聞き、聞いてはまた歩く。というようにすれば、次第に行こうとする目的地に着けるのである。」と述べて修行の譬えとしている。

「道ハ方体無シ。執着ス可カラズ。卻ッテ文義上ニ拘滯スレバ、道ヲ求ムルコト遠シ。例えば人が天について説く場合、必ずしも實際に天そのものを見て言うわけではない。天にある太陽や月や、風・雷などを天であると言うのはよくないし、地上にある人や物、或いは草木を天でないと言うのも不可である。道は即ち天に外ならないからだ。……。」とある。

「只ダ生後スル所ヲ知ラント要バ、則チ道ニ近シ。」⁽¹⁾と説くが、これは

要するに、何を先にし、何を後にするか、物事の順序を知ることが大切で、それが出来れば理想に近いという意味への引用で、大学よりとる。

㊸ (1) 物有本末。事有終始。知所先後。則近道矣。

「人ハ才ニ随ツテ成就スルヲ要ス。オトハ是レ其ノ能ク為ス所ニシテ、夔ノ⁽¹⁾楽、稷ノ⁽²⁾種ノ如シ。……天理ニ純ナル処ニ到レバ、亦能ク器ナラス。夔・稷ヲシテ芸ヲ易エテ為少シメバ、当ニ亦之ヲ能クスベシ。」と、あるが、これは人が自分の才能に応じて自分を完成することが肝要であり、その心を天理に純一にすべきなどを説いたのであるが、書経の舜典および論語 為政篇よりひく。

㊸ (1) 帝曰。夔。命汝典樂。教胥子。

(2) 帝曰。棄。黎民阻飢。汝后稷。播時百穀。

(3) 子曰。君子不器。

「宮貴ニ素シテハ宮貴ニ行イ、患難ニ素シテハ患難ニ行ウガ如キハ皆是レ器ナラス。此レ惟ダ心ノ体ヲ養イテ正シキ者ノミ之ヲ能クス。」と中庸の語句をとって説いている。

㊸ (1) 前例参照

「数町歩の水源のない池水となるよりも、広さは数尺に過ぎないが、生命の尽きない井戸水となる方がましである。」と。これなどは学問のことに譬えて述べているのである。

「人君ハ端拱清穆、六卿職ヲ分ツテ、天下乃チ治マル。心ノ五官ヲ統ブルハ、亦此ノ如クナルヲ要ス。今眼ノ視ント要ル時、心便チ逐ツテ色上ニ在リ、耳ノ聴カント要ル時、心便チ逐ツテ声上ニ在ラバ人君ノ宮ヲ込バント要ル時、便チ自ラ去キ坐シテ吏部ニ在リ、軍ヲ調セント要ル時、便チ自ラ去キ坐シテ兵部ニ在ルガ如シ。此ノ如クンバ豈惟ニ君ノ体ヲ失ウノミナランヤ、六卿モ亦皆其ノ職ヲ得ザラン。」と、述

伝習録に於ける引用典例 (一)

べ天下の政治に譬えて、心を動かさない修行をすることが第一であると説いている。

「色ヲ好ミ、利ヲ好ミ、名ヲ好ム等ノ心ハ、固ヨリ是レ私欲ナリ。しかし、間思雜慮ノ如キハ、如何ゾ亦之ヲ私欲ト謂ウヤ。」という質問に対して、

「畢竟色ヲ好ミ、利ヲ好ミ、名ヲ好ム等ノ根上ヨリ起レバナリ。自ラ其ノ根ヲ尋ネバ便チ見ン。例えばお前の心が、自身強盗をする意思のないことが明白に分るのはなぜか。お前には、元来そうした心が全然ないからである。けれども、色を好み、利益を好み、名聞を好むことについて、果してそのようにならないと断言できるかどうか。お前がもし財貨・色・名聞・利益などを好む心について、強盗をしないことと同様に、すべて全くなくなり、清潔であるならば、そこそこの本体であって、そこに無用な間思雜慮の起ることがどうしてあろう。」と述べ強盗を例として間思雜慮の排除の必要を説いている。さらに、

「此レ便チ是寂然不動ナリ。便チ是レ未発ノ中ナリ。便チ是レ廓然太公ナリ。自然ニ感ジテ遂ニ通ズルナリ。自然ニ発シテ節ニ中ルナリ。自然ニ物来ツテ順応スルナリ。」とつづけ、易ノ繫辭上伝・中庸および程子の述言などをひいて説いている。

㊸ (1) 易。无思也。无为也。寂然不動。感而遂通天下故之。非天下之至神。其孰能与於此。

(2) 前例参照

(3) 所謂定者動亦定静亦定。無將迎無内外。苟以外物為外牽己從之是以己性為有内外。且以性為随物外則当其在外時何者為在內。是有意絶外誘不知性無内外。既以内外為二本則又烏可遽語定。夫天地常以其心普可物而無心。聖人常以其情順万物而無情。故君子学莫若廓然太公物来順心。(程明道 定性書)

「志至氣次⁽¹⁾について両者の不可分一体の關係にあること。」を説いて

いる。孟子 公孫丑上篇よりとる。

㊸(1) 夫志氣之帥也。氣體之充也。夫志至焉。氣次焉。故曰。持其志。無暴其氣。

「聖人ハ天ノ如シ。往クトシテ天ニ非ザル無シ。三光ノ上ハ、天ナリ。九地ノ下モ、亦天ナリ。天何ゾ嘗テ降ツテ自ラ卑ウスルコト有ラスヤ。」これ聖人の態度を天に譬えている。また、

「聖人は偉大にして而も變化自在、方体をもたないものである。これにくらべて賢人は山岳のように、自己の高さを守るのみで、限られたところがある。しかし百仞の山を引き上げて千仞にすることができず、千仞の山を引き上げて万仞にすることができないように、賢人も決して自己を引き上げて高くすることはない。もし引き上げて高くするようなことがあれば、それは人を偽る行為である。」と述べて、また賢人の態度を山に譬えている。孟子 尽心下篇よりひく。

㊸(1) 前例参照

「人ノ未ダ便チ手ヲ下ス処有ラザルヲ恐ル。故ニ人ヲシテ時時刻刻未発ノ前ノ氣象ヲ求メシメ、人ヲシテ目ヲ正シテ視ルモ惟ダ此レ、耳ヲ傾ケテ聴クモ惟ダ此レナラシム。即ちこれは『瞎ないうちに慎み、聞かない前に懼れる。』の修行と同じ意味である。両者の説き方は相反するが、どれも学問する者の都合のよいように已むを得ず採った指導法に外ならない。」とあるが、中庸よりとって説いてある。

㊸(1) 道也者。不可須臾離也。可離非道也。是故君子戒慎乎其所不睹。恐懼乎其所不聞。

「一時一事ニ在リテハ、固ヨリ亦之ヲ中和ト謂ウ可シ。然レドモ未ダ之ヲ大本達道ト謂ウ可カラズ。」と、中庸にある中和を説明している。

㊸(1) 前例参照

「人ノ性皆善ナリ。中和ハ是レ人人ノ原ヨリ有ルモノナレバ、豈無シト謂ウ可ケンヤ。但ダ常人ノ心ハ、既ニ昏蔽スル所有レバ、則チ其ノ本体ハ、亦時時発見スト雖モ、終ニ是レ暫明暫滅ニシテ、其ノ全体大用ニ非ズ。

元来如何なる時も中でないことはないようであってこそ、はじめてこれを大本といい、如何なる場合も和でないことがないようであってこそ、はじめて達道といひ得るのである。そしてこの世の最も至誠の人、即ち聖人にして、はじめてこの天下の大本を樹立することができるのである。」と述べて孟子 告子上篇および中庸よりひいて説く。

㊸(1) 人性之善也。猶水之就下也。

(2) 唯天下至誠。為能經綸天下之大經。立天下之大本。知天地之化育。夫焉有所倚。

「未ダ相着カズト雖モ、然レドモ平日色ヲ好ミ、利ヲ好ミ、名ヲ好ムノ心ハ、原未ダ嘗テ無カラズ。既ニ未ダ嘗テ無カラズンバ、即チ之ヲ有リト謂ハン。既ニ之ヲ有リト謂エバ、則チ亦偏倚無シト謂ウ可カラズ。

之ヲ瘡を病んでいる人に譬えて見れば、時には発病しないことがあっても、病原を根本的に除かない限りは、病気の全くない健康体とはいえないようなものである。

須ズ是レ平日ノ色ヲ好ミ、利ヲ好ミ、名ヲ好ムナドノ項ノ一応ノ私心ヲ掃除蕩滌シテ、復纖毫ノ留滞スル無ク、而シテ此ノ心ノ全体廓然トシテ、純ヲ是レ天理ナラシメバ、方ニ之ヲ喜怒哀楽ノ未発ノ中ト謂ウ可ク、方ニ是レ天下ノ大本ナリ。」これなどは瘡の病人を譬として説いている。

「聖人孔子の教えの全体を見て、これを把握し得たのは顔子だけで

ある。

喟然ノ一嘆ヲ観テ見ル可シ。

顔子が孔子の偉大さを、ためいきをつけて嘆じた。論語の中の彼の語を見ればそれが分る。即ち、彼はその中で『孔夫子は弟子の学力に応じ、順序に従ってよく教え導かれ、我々の知識を博くするのに学問を以てし、我々の行為を締めるために礼を教えられた。』といっているのは、彼が孔子の教えの真の精神を見破って後の語に外ならない。この博文約礼が、⁽³⁾どうして人をよく教え導くことであるのか学問をするものはその点を考えなければならぬ。道の全体については、聖人も人に説き知らせることはむづかしかつたので、学問をするものもそれが自分で修行し自分で悟らなければならぬ。しかるに顔子が『孔夫子の後について行こうと思ってもその方法がない。』⁽²⁾といっているのは即ち『文王は道の至るを待ち望んだが、まだ見ることはできなかった。』⁽⁵⁾というのと同じ意味であり、道を待ち望んでまだ見ないとは、真に道を見たことに外ならないからである。それ故に、私は顔子⁽¹⁾がなくなつて以後、聖人の教える正しい学問の正しい系統は亡んでしまつて遂によく伝わらなかつた。』というのであるが、論語 先進・子罕の兩篇および孟子 離婁下篇よりひいて説いてある。

㊦ (1) 夫子喟然歎曰。吾与点也。(先進)

(2) 顔淵喟然歎曰。仰之弥高。鑽之弥堅。瞻之在前。忽焉在後。夫子循循然善誘人。博我以文。約我以礼。欲罷不能。既竭吾才。如有所立卓爾。雖欲從之。末由也已。(子罕)

(3) 博我以文。約我以礼。(同前)

(4) 雖欲從之末由也已。(同前)

(5) 文王視民如傷。望道而未之見。
「告子ハ是硬ク此ノ心ヲ把握シテ、他ノ動カザランコトヲ要ム。⁽¹⁾孟子ハ卻ツテ是レ義ヲ集メ自然動カザルニ到ル。」⁽²⁾とあるが、公孫丑上篇

伝習録に於ける引用典例(一)

よりひいて説く。

㊦ (1) 夫子之不動心。与告子之不動心。可得聞与。告子曰。不得於言。勿

求於心。不得於心。勿求於氣。不得於心。勿求於氣。可。不得於言。勿求於心。不可。

(2) 其為氣。配義与道無是餒也。是集義所生者。非義襲而取之也。行有不慊於心。則餒。我故曰。告子未嘗知義。以其外之也。

「万象森然タル時ハ、亦冲漠無朕ナリ。」⁽¹⁾即ち、天地間に並びたつ万物や一切の現象が心中に反映している時は一方ではまた心中が虚無の状態の時である。の意。

「冲漠無朕ハ一ノ父ニシテ、万象森然ハ精ノ母ナリ。一ノ中ニ精有リ。精ノ中ニ一有リ。」⁽²⁾即ち、これは心の本体と作用との関係のもとになるものとして、父母の義を表現している。

㊦ (1) 冲漠無朕。万象森然已具。未應不是先。己應不是後。如百尺之木。

自根本至枝葉。無一不貫。(程伊川)

(2) 前例参照

「心ノ外ニ物無シ。吾ガ心ノ一念ヲ発シテ親ニ孝ナルガ如キ、即チ親ニ孝ナルハ便チ是レ物ナリ。」⁽¹⁾即ち親孝行を例として、親に孝行したという気持がおこつたら、その親孝行ということが物なのであると説いてある。

「今吾ガ所謂格物ノ学ヲ為ス者モ、尚才多クワ耳ニ流ル。况ヤ口耳ノ学ヲ為ス者、能ク此ニ反ランヤ。」⁽¹⁾荀子 勸学篇の中からとつて訓言している。

㊦ (1) 前例参照

「後世の学問は結局のところ、ただ無理に結果だけを求める、そくせきの修行にすぎない。」⁽¹⁾と、孟子 公孫丑上篇よりひいて注告してい

る。

㊤(1) 何謂浩然之氣。曰。難言也。其為氣也。至大至剛。以直養而無害。則寒於天地之間。其為氣也。配義與道。無是餒也。是集義所生者。非義襲而取之也。

「格⁽¹⁾トハ正スナリ。其ノ正シカラザルヲ正シテ、以テ正ニ歸スルナリ。」と述べているが、大学の格物について陽明の説くところは非常に多い。

㊤(1) 先致其知在格物。物格而后知至……。

「格物をするに、動静の区別はない。静も事に外ならないからである。孟子は『必ず事とせよ。』⁽¹⁾と言ったが、必ずと言う以上、これは心の動静にかかわらず、常に事とすることがある。」公孫丑上篇よりひいて説く。

㊤(1) 必有事焉。而勿正。心勿忘。勿助長也。

「工夫ノ難キ処ハ、全ク格物致知ノ上ニ在リ。此レ意ヲ誠ニスルノ事ナリ。意既ニ誠ナレバ、大段心モ亦自ラ正シク、身モ亦自ラ脩ル。」⁽¹⁾ これまた大学より説いてある。

㊤(1) 古之欲明明德於天下者。……欲脩其身者。先正其心。欲正其心者。先誠其意。欲誠其意者。先致其知。致知在格物。物格而后知至。知至而后意誠。意誠而后心正。心正而后身脩。……

更に語を続けて修行の中で格物致知のむつかしさを述べ前文と共に大学の格物・致知と誠意・正心・脩身との関係について説いているのであるが、中庸よりひく。

「但ダ心ヲ正シ、身ヲ脩ムルノ工夫ハ、亦各々カヲ用ウルノ処有リ。身ヲ脩ムルハ是レ已⁽¹⁾発ノ辺ニシテ、心ヲ正スハ是未⁽¹⁾発ノ辺ナリ。

心正シキトキハ則中ニシテ、身脩ルトキハ即ち和ナリ。」とある。

㊤(1) 前例参照

「仁者ハ天地万物ヲ以テ一体ト為ス。⁽¹⁾一物モ所ヲ失ウコト有ラシメバ、便チ是レ吾ガ仁ノ未ダ尽サザル処有ルナリ。」と、程明道の言をひいている。

㊤(1) 仁者以天地万物為一体。(近思錄 道体篇)

「只だ明明徳を説いて、親民を説かなければ便ち道教や仏教の説と似たものとなる。」と、大学よりひいて説いている。

㊤(1) 大学之道。在明明徳。在親民。在止於至善。

「惟ダ其レ箇ノ発端ノ処有リ。所以ニ生ズ。惟レ生ズ。所以ニ息マズ。之ヲ木ニ譬ウルニ、其ノ始メ芽ヲ抽クハ、便チ是レ木ノ生意発端ノ処ナリ。芽ヲ抽イテ然ル後幹ヲ発ス。幹ヲ発シテ然ル後枝ヲ生ジ葉ヲ生ズ。然ル後は生生シテ息マズ。若シ芽無クンバ、何ヲ以テカ幹有リ枝葉有ラン。能ク芽ヲ抽クハ、必ズ是レ下面ニ箇ノ根ノ在ル有レバナリ。根有レバ方ニ生ズ、根無ケレバ便チ死ス。根無クンバ何ニ從ツテカ芽抽カン。父子兄弟ノ愛ハ、便チ是レ人心ノ生意発端ノ処ニシテ、木ノ芽ヲ抽クガ如シ。此ヨリシテ民ニ仁シ物ヲ愛ス。便チ是レ幹ヲ發シ枝ヲ生ジ葉ヲ生ズルナリ。」と、即ち、父子兄弟の愛の芽ばえ生長を木の発生生成に譬えて、そして孟子 尽心上篇の語をひいて説いている。

㊤(1) 前例参照

「墨氏ノ兼愛ハ差等無ク、自家ノ父子兄弟ヲ將テ、途人ト一般ニ看、便チ自ラ発端ノ処ヲ没ス。芽ヲ抽カザレバ、便チ他ニ根無キヲ知ル。便チ是レ生生シテ息マザルニアラズ。安ゾ之ヲ仁ト謂ウヲ得ン。

孝弟ハ仁ヲ為スノ本ナリ。卻ッテ是レ仁ノ理ハ裏面ヨリ發生シ出デ来ル。と、これもやはり木の芽、根を譬として墨氏の兼愛説とを比較しつつ、眞の仁の發生を説いているのであるが、孟子 勝文公上篇および論語 学而篇より引用している。

㊦ (1) 吾聞夷子墨者。……。夷子曰。儒者之道。古之人若保赤子。此言何謂也。之則以為愛無差等。施由親始。

(2) 其為人也孝弟。而好犯上者鮮矣。不好犯上。而好作乱者。未之有也。君子勢本。本立而道生。孝弟也者其為仁之本与。

以上が上巻の序と徐曰仁所録および陸原静所録に筆録されたものについて論述したのであるが、続稿として上巻の薛尚謙所録および中巻・下巻について順に論述し、出典を引用し、譬例をあげた陽明学におけるその意とするところについて論究したい。

参 考 文 献

王文成公全書

三陽明全集

精校

断句王陽明伝習録

伝習録（漢文大系第16巻）

伝習録（新釈漢文大系第13巻）

伝習録（漢籍目字解全書）

大学・中庸・論語・孟子（漢文大系第1巻）

尚書（漢文大系第12巻）

老子新釈

荀子（漢文大系第15巻）

礼記（漢文大系第17巻）

近思録（漢文大系第22巻）

伝習録に於ける引用典例（一）